



 Data	2024-30
監督・脚本・製作: クリストファー・ノーラン	
原作: カイ・バード、マーティン・J・シャーウィーン「オッペンハイマー」(ハヤカワ文庫)	
出演: キリアン・マーフィー／エミリー・ブラント／マット・デイモン／ロバート・ダウニー・Jr.／フローレンス・ピュー／ジョシュ・ハートネット／ケイシー・アフレック／ラミ・マレック	

👁️👁️ みどころ

『インセプション』(10年)をはじめとするクリストファー・ノーラン監督作品は「時空をさまよう人たちが錯綜する物語」が多いから、私は苦手。しかし、IMAX®撮影によるその映像の美しさには定評があり、「ノーラン組」に結集する著名俳優も多い。渡辺謙もその一人だ。

そんなノーラン監督が“伝記モノ映画”に初挑戦！オッペンハイマーは「世界ではじめて原子爆弾を完成させた理論物理学者」として有名だが、その人物の栄光と没落の生涯とは・・・？

前半の“天才群像劇”と二人の女性を巡る恋愛劇は面白い。また、「マンハッタン計画」の責任者として過酷な任務を遂行し成功させる姿は感動的ですが、しかるに、後半約1時間、彼はなぜソ連のスパイ容疑として公聴会にかけられてしまったの？

広島、長崎への原爆投下シーンをどう描くの？それは「戦争を早期終結させるための正義(大義)」だったの？日本側からはそんな疑問や問題提起があるが、本作でのその“論点”の描き方は如何に？

アカデミー賞最多7部門受賞は当然と思える本作の充実ぶりを確認しながら、本作の問題提起をしっかりと受け止めたい。

■□■ ノーラン監督に注目！本作の理解可能性は？ ■□■

人間は誰でも好き嫌いがあるが、映画についても、監督についても、出来の「善し悪し」とは別に、「好き嫌い」があるのは仕方がない。そんな視点で考えると、私はクリストファー・ノーラン監督はあまり好きな方ではない。それは、彼がレオナルド・ディカプリオと渡辺謙を起用した超大作『インセプション』(10年)を見た時に、「これはあまりにも難解！

私には理解不可能？」と思わされたためだ（『シネマ 25』未掲載）。同じような意味で私が好きになれなかった映画が、キアヌ・リーブスの主演で大ヒットした『マトリックス』（99年）だが、両作から私が感じる違和感はどうしようもないものだった。

もっとも、クリストファー・ノーラン監督は、『メメント』（01年）、『インセプション』、『TENET テネット』（20年）と続けて、「時空をさまよう人たちが錯綜する物語」を手がけてきたが、彼の最新作たる本作はきっと分かりやすい問題提起作！だって本作は、「第二次世界大戦下、世界の運命を握った天才科学者オッペンハイマーの栄光と没落の生涯を実話に基づき描いた」映画なのだから。

本作は、2023年7月の全米公開を皮切りに、世界興行収入10億ドルに迫る大ヒットを記録し、実在の人物を描いた伝記映画としては歴代1位になっているそうだ。そんな話題作の公開が日本でなかなか実現せず、ようやく2024年3月29日から公開できることになったそうだが、それは一体なぜ？そこにはきっと、何か「曰く、因縁」がありそうだ。そんな意味でも、私はノーラン監督の最新作に注目！そして、本作は必見！

■第96回アカデミー賞7部門をゲット。その出来は？■

第96回アカデミー賞では、山崎貴監督の『ゴジラ-1.0』（23年）が視覚効果賞を、宮崎駿監督の長編アニメ『君たちはどう生きるか』（23年）が長編アニメーション賞を受賞した。日本のマスコミがそのことを大きく報道したのは当然だが、映画評論家の私が注目したのは、去る2月23日に観たフランス映画『落下の解剖学』（23年）が作品賞、監督賞、脚本賞、オリジナル編集賞にノミネートされたことだ。

私は同作を2月23日に鑑賞したが、その完成度の高さにびっくり。もっとも、フランス映画がアカデミー賞の作品賞、監督賞等を受賞するのは到底無理だと予想し、作品賞、監督賞等最多13部門にノミネートされていた『オッペンハイマー』の「独り勝ち」を予想していたが、結果は案の定、『オッペンハイマー』が作品賞、監督賞等最多7部門をゲットした。『インセプション』でディカプリオと共演した渡辺謙をはじめ、各界著名人たちの賞賛の声が新聞広告の一面を使って載せられているが、さてその出来は・・・？

■原作は？脚色は？なぜプロメテウスとの対比？■

日本でもオッペンハイマーという名前は、アインシュタインと同じように有名だが、その実績や実像を知っている人は少ない。ノーラン監督初の伝記映画たる本作は、「プロメテウス」の紹介から始まる。ギリシャ神話に登場するプロメテウスは、神の手から火を盗んだことによって神の怒りに触れ、生きながらにして巨大な鷲に毎日肝臓をついばまれるという拷問にかけられ、その刑期が3万年も続いた男として有名だ。

ノーラン監督が本作をそんなシーンから始めたのは、世界初の原子爆弾を完成させた（させてしまった）男オッペンハイマーを、神の火を盗んだ男プロメテウスと重ね合わせたためだ。したがって、オッペンハイマーの人間像を考え、理解するについては、しっかりプロメテウスと対比したい。

もっとも、それに続いて本作は、第二次世界大戦後の東西冷戦の中、アメリカで始まった赤狩りの時代と、その中でオッペンハイマーが、1947年に設立された原子力委員会の議長を6年間も務めながら、実は共産主義思想に毒された「ソ連のスパイ」だったのではないかと嫌疑により、公聴会で厳しく追及されるストーリーになっていくので、それに注目！このストーリーは、「マンハッタン計画」の成功に至る「天才群像劇」の裏側に秘められた人間のマイナス面を赤裸々に描くものだから、その生々しさと毒々しさをしっかり確認したい。

■天才群像劇の主役は？ノーラン組の常連たちが熱演！■

黒澤明監督が『七人の侍』(54年)を監督した時の三船敏郎は主役ではなく、一種の“道化役”で、主役は『七人の侍』のリーダーたる島田勘兵衛役を演じた志村喬だった。それは『乱』(85年)で狂阿弥役を演じたピーターと同じようなものだ。また、『影武者』(80年)の主役をめぐるのは、勝新太郎と黒澤監督との確執が表面化して、勝は降板。勝の代わりには仲代達矢が主役を務めることになったのは有名な話だ。

しかして、ノーラン監督初の伝記映画たる本作で主役のオッペン・ハイマー役を演じる俳優は一体誰？ノーラン監督の周りには、日本でいう「黒澤(明)組」、「山田(洋次)組」と同じように、「ノーラン組」に結集する俳優たちがキラ星の如く集まっているから、本作の主役はきっとその中の一人、例えば『インター・ステラー』(14年)のマット・デイモン…？そう思われていたが、ノーラン監督はオッペンハイマー役に、彼の映画5作品(『ダークナイト』三部作、『インセプション』『ダンケルク』(17年))に出演しているが、一度も主役を演じていない俳優、キリアン・マーフィーを起用したからビックリ！

マット・デイモンは、「マンハッタン計画」の最高責任者たる陸軍のレズリー・グロヴス役を演じている。他方、『アマデウス』(85年)でモーツァルトの宿敵(?)となった宮廷音楽家サリエリと同じように、オッペンハイマーの宿敵(?)となる、アメリカ原子力委員会の委員長レイス役は『アイアンマン』(08年)等のロバート・ダウニー・Jr.が演じ、また、オッペンハイマーがケンブリッジ大学で出会う心の師、ニールス・ボーア役は『ダンケルク』等のケネス・ブラナーが「ノーラン組」に初参加して演じている。

映画には「青春群像劇」という範疇がある。戦後の民主化された日本を舞台に、青春群像劇として明るい日本の未来を描いた映画が、何作も作られた映画『青い山脈』だったが、以降、それぞれの時代に応じてたくさんの青春群像劇が作られてきた。それらとの対比で言えば、本作は「天才群像劇」だ。これは本作のパンフに収録されている、森直人(映画評論家)氏のレビュー『「パンドラの箱」を開けた人間の悲劇」で使われている表現だが、実に言い得て妙だ。もっとも、青春群像劇は誰にでもわかりやすいが、理論物理学をはじめとする天才学者たちの「天才群像劇」を理解するのは極めて難しい。しかし、そのポイントは彼らが語っている物理学の理論を理解することではなく、彼らの人間性を理解することだから、心配は無用だ。

ハーバード大学を3年で卒業したオッペンハイマーは、イギリスのケンブリッジ大学に留学した後、ドイツのゲッティンゲン大学に移籍、そしてハーバード大学、カリフォルニア工科大学、カリフォルニア大学バークレー校等で博士研究員として研究を進め、1929年、25歳にしてカリフォルニア大学バークレー校とカルテックで物理学科の准教授を務めることになったが・・・。

■□■IMAX®撮影の迫力を大スクリーンでたっぷりと！■□■

各地の「シネコン」が設備の質を競う中、今やIMAX®は特別料金をプラスして支払っても十分納得できるレベルになっている。ノーラン監督は早くから撮影監督のホイテ・ヴァン・ホイテマと組んでIMAX®撮影に固執してきたが、本作ではIMAX®65mmと65mmラージフォーマット・フィルムカメラを組み合わせたとそうだ。

これまでのノーラン監督の「宇宙を舞台とした映画」では、IMAX®撮影によって、人間の目では見ることでできないマクロの世界を大スクリーン上に映し出してきた。それに対して本作では、天才物理学者オッペンハイマーの頭脳と心の中にあるものを、IMAX®撮影によって大スクリーン上に映し出して出すことに挑戦！人間オッペンハイマーへの外観がいかに苦悩に満ちた表現をしようとも、あくまで一介の人間だが、その頭脳の中は・・・？また、その心の中は・・・？めったに見ることのできない、そんな映像を、大スクリーンでしっかりと。

■□■2人の女性との恋は？若き日の主義主張の在り方は？■□■

オッペンハイマーは天才物理学者だが、20歳代の男が様々な主義主張に悩み、女性との恋に悩むのは、私の体験を考えても当然のことだ。1949年生まれの際は、平和憲法の中で、戦後復興から高度経済成長を成し遂げていく「昭和の日本」という幸せな時代を過ごしてきた。しかし、1904年生まれのオッペンハイマーは、青春時代に、1929年にアメリカで起きた“大恐慌”の洗礼を受けた上、1930年代のナチスドイツがヨーロッパのみならず、アメリカをも戦争に巻き込んでいったから大変だ。さらにオッペンハイマーはニューヨーク生まれだが、ドイツからのユダヤ系移民の子だったから、さらに大変だ。

そんな男が20歳代にジーン・タトロック（フローレンス・ピュー）と恋に落ちたのは当然。『ストーリー・オブ・マイライフわたしの若草物語』（19年）（『シネマ47』10頁）で瑞々しく主演を演じたフローレンス・ピュー扮する女性、ジーンは、精神科医で共産黨員だ。注目すべきはその職業上の業績ではなく、共産黨員としての活動とオッペンハイマーとの男女関係における奔放さだ。そんな女性ジーンに強烈に惹かれながらも、オッペンハイマーが思想上の理由その他によってジーンと別れ、生物学者で植物学者のキャサリン（エミリー・ブランド）と結婚したのは一体なぜ？

オッペンハイマーの「伝記モノ映画」の中でそれは興味深いテーマだが、「天才群像劇」たる本作では、それ以上に優先して描くべきものがたくさんあるため、オッペンハイマー

の女性観や結婚観はほどほどに・・・。

■□■原子爆弾開発の大義は？栄光に向かって着々と■□■

2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻を受けて、アメリカは直ちにその支援を発表し、行動に移した。これは第二次世界大戦中のイギリスがナチスドイツの攻撃に苦しむ中で、アメリカが対ナチスドイツへの参戦が遅れたことへの反省によるものだ。もっとも参戦には遅れたものの、ユダヤ系の物理学者をたくさん受け入れていたアメリカが、ドイツが開発中の原子爆弾に「負けてはならじ」とばかりに、ネジを巻く姿は興味深い。戦後70数年、平和憲法の下で「戦力を持たない」と約束した日本の現在の価値観とは、全く異質の価値観が当時のアメリカを支配していたのは当然だ。

1922年7月15日に創設された日本共産党は「戦争反対、天皇制反対」を唱えたが、アメリカ共産党は・・・？その点については、本作が描くジーンやオッペンハイマーの弟で、放射線研究のバックグラウンドを持つ、素粒子物理学者ながら共産党員として活動していたフランク（ディラン・アーノルド）たちの活動をしっかり確認したい。

オッペンハイマーは共産党員のフランクや恋人ジーンの影響を受けながらも、共産党の思想とは一線を画していたから、「マンハッタン計画」の最高責任者たるレズリーのお眼鏡にかなうことに。「マンハッタン計画」という巨大な極秘計画の責任者になるには、理論物理学者としての才能だけではなく、オルガナイザーとしての能力が不可欠だが、オッペンハイマーのその方面での才能は如何に？それは本作の中盤、約1時間を見ればよくわかるので、それをしっかり確認したい。

■□■栄光から一転スパイ容疑へ！しかし、本人の信念は？■□■

本作の日本での公開が遅れたのは、広島、長崎への原爆投下というアメリカにとっては「戦争を終結させるための正義（大義）」を日本がどう受け入れるのかという問題があったためだ。しかして、「マンハッタン計画」の最終段階として1945年7月に実施された原子爆弾の爆発実験成功に歓喜するオッペンハイマーやレズリーたち「マンハッタン計画」従事者たちの弾けんばかりの笑顔は、広島、長崎でのキノコ雲の姿が脳裏に焼き付いている日本国民の目には、到底受け入れられるものではない。もっとも本作は日本でも前評判通り、私が鑑賞した平日の昼間でもほぼ満席だったから、日本人観客も必ずしも本作に否定的ではないのだろう。本作についての多くの新聞批評はその点に触れているが、上記のようなこだわりを持つのは私のような団塊世代までで、Z世代をはじめとする多くの若者たちは広島と長崎に原爆が投下されたことは過去の事実として客観的に受け止めているだけなのかもしれない。他方、ノーラン監督は3時間の長尺になった本作のラスト1時間は、オッペンハイマーの“ソ連スパイ容疑”についての公聴会における追及を丹念に追っていくのでそれに注目！俳優としてもまた映画監督としても有名なチャールズ・チャップリンは赤狩り旋風の中で国外追放処分を受けてしまったが、オッペンハイマーは如何に？

2024年4月4日安倍派の“裏金疑惑”や“政治資金規正法違反問題”についてやっと自民党

の最終処分が下されたが、今後この処分をめぐってさらに自民党内部の対立が激化していくことは確実だ。しかし、本作を見る限り、「マンハッタン計画」の遂行にあたって、また原爆投下後の東西冷戦、赤狩り旋風による逆風の中でも、オッペンハイマーの信念が変わらなかったことが本作を見ているとよくわかる。私は冒頭に書いたようにノーラン監督作品はあまり好きではないが、本作は大好きだ。

本作については、パンフレットに収録されている①尾崎一男（映画評論家・映画史家）氏の「マクロからミクロへ、そして具象からアブストラクトへ」クリストファー・ノーランにとっての『マンハッタン計画』②李相日（映画監督）氏の『『理性』の崩壊を、理性で描く』③森直人（映画評論家）氏の『『パンドラの箱』を開けた人間の悲劇』④秦早穂子（映画評論家）氏の「忘れない」という4本のレビューと⑤橋本幸士（素粒子物理学者、京都大学大学院理学研究科/映画『オッペンハイマー』字幕監修）氏のコラム「物理と世界」を熟読しながら、しっかり味わいたい。

2024（令和6）年4月4日記